

研究論文

によぜがもん 如是我聞

是の如く 我は聞きけり

関東実業団連盟理事 山下明人（日本 IBM）

「先」

先には「先の先」「対の先」「後の先」の3種類があります。しかし、それぞれの基準はいまひとつ不明確ではないでしょうか。そのことを、ある日ある先生に聞いたことがあります。そして「基準は相手の攻撃です」と教えていただきました。相手の攻撃の「意図」に対応するのが「先の先」。具体的には相手との間合いやタイミングを調整して当身の5要素のどれかを崩すことで相手が当身を出せないままに制圧します。

しかし、相手が当身を出す体勢に入ってしまったら「対の先」。具体的には、迅速に接近して当身のパワーが爆発する前に受けを併用しながら当身を出して制圧します。

また、相手の当身が既に出てしまったら「後の先」。角度処理を施して当身の威力を激減させて反撃を試みます。

相手がカウンター狙いの時には「先の先」が使えないと上手に制圧できず、一方で攻撃力の高い相手には「後の先」での対応もできないと難しい状況に陥ります。万能の「先」はなく適材適所の使い分けこそが自分有利相手不利の状況を作れる秘訣と教わりました。もう少し科学的アプローチが好きな方は、それぞれにベクトルの「点」「大きさ」「向き」への対処と考えると理解しやすいかと思います。

「法器」

少林寺拳法教範には法器の記述があります。昭和27年発行の初版を見ると少林寺拳法の体系の中に「独鈷伝」「如意伝」「金剛伝」「秘針伝」「外物伝」という名称がみられます。現在の教範には「独鈷伝」「如意伝」「金剛伝（錫杖、半棒）」の三種のみの名称が記述されています。しかし具体的な使い方について、それ以上詳しい記述はありません。

昭和30年発行の教範には、開祖自らがモデルとなった如意陣の写真が掲載されています。また現在の教範に「法器の中で一番活用されているもの」との記述があり、開祖が錫杖を持っている写真は見当たらないのに、如意を持っていたり腰に差している写真は複数あります。法器といえば錫杖が有名ですが、これらから推測するに開祖は如意棒を最も実用的な法器と捉えて重用していたことが伺えます。

さて、古い教範に受け方の名称は記述されていますが、攻撃技の説明は一切ありません。また「どんな叩き方をしても棒で叩けば誰だって倒れる」と開祖が語っていたと聞いたことがあり、これらのことから開祖は攻め技より受け技を重視していたのではないかという仮説が導きだせます。これは少林寺拳法の特徴のひとつである守主攻従とも合致します。また法形の説明がないことから、法器は手の延長という考え方のもと体系的な技術は構築されなかったことが推測されます。

最後に、いくつか気になる口伝や伝聞をご紹介します。錫杖を見事に振り回す高段のある先生は「開祖は自分のように振り回したりしなかった」と言われていました。一方別の先生は「頭上でクルクルと回してからドンと相手の胴について穴を開けた」あるいは「棒の端を持たせて投げるのが上手かった」と言われていました。また他の古参の先生から「開祖は法器の使い方は見せたけど、名前は古参の先生たちがつけたんだよ」というお話を聞いたこともあります。ちなみに昭和30年発行の教範の如意陣を見ると「合気構」によく似た構で「角構」、「中段構」によく似た「縦構」など、素手と得手と名前は違うものの形はよく似た構えばかりです。名前は古参の先生方がつけたという話と符合する気がします。

一番気になった伝聞は「少林寺拳法の技のほとんどは棒術から来た」というものです。開祖の言葉の中にも「当時の中国は戦争中なのだから素手より棒などを持って戦うのが自然だった」というような意味の文章を見た記憶があります。

「拳の三訓 守破離」

修行の段階として書道の「楷書・行書・草書」に例えられる守破離ですが、ある先生から別の例えをお伺いしたことがあります。

「自問自答」という言葉がありますが、真逆の「他問他答」という言葉を作ります。あとは「自」と「他」を入れ替えると「他問他答」「自問他答」「他問自答」「自問自答」の4パターンとなります。入門したての人に「こんな時どう対処したらいい」と聞いても答えは返ってきません。指導者が対処方法を教えます。これが「他問他答」の段階です。そして緑帯茶帯黒帯と修行を続けながら先生に「こんな時はどう対処したら良いでしょうか」と問い、先生は「そんな時はこう対応するんだ」と教えます。これは「自問他答」です。この「他答」を必要とする二つの段階は師の格に至る「守」の段階です。

やがてある程度の法形を身につけ、修練を積んで段々と拳法の何たるかがわかってきます。そして師から「こんな時はどうしたらいい」と尋ねられ「こう対処したら良いと思います」と答えられるようになってきます。これが「他問自答」の段階、すなわち「破」です。

そのうち「だったら、こんな時はどうすべきだろう」と自ら問い、自ら答えを導きだせるようになります。それこそが「自問自答」であり「離」の段階だとその先生は言われました。

「一気動作」

「攻撃系の格闘技はブロックと攻撃をランダムに食い合わせて使いますが、少林寺拳法は守主攻従だから、読み→防御→反撃の流れになります」とある先生から聞きました。また「攻撃系格闘技はスピードと反射神経、そしてパワーのレベルを向上させることが上達への近道、一方少林寺拳法は防御と反撃を組み合わせて身体に刷り込ませておき、一旦相手の攻撃の意図を読んだら途中で止まることなく防御反撃までもっていくよう刷り込んでおくことが大切です」ともお伺いしました。

「一気動作」とは「読み、防御、反撃」という一連の流れを「ながら」で行うことです。法形の動きを繰り返して身体に染み込ませるのはそのためです。一方「読み」から繋がってないと、後工程の防御反撃に連携できません。言い換えれば「相手の意図を察知して、適切な反撃手段を選択し、相手の攻撃を処理するまでを途切れさせずに行うこと」と言うことができそうです。

「八方目」

教範に「少林寺拳法では、他の武道とは少し異なった目配りを要求している」「目を動かさずして、八方を見る」と明記されています。

なんとなく分かるのですが、気がついたらしっかり相手を見据えている自分がいて、ある時ある先生に聞いてみたことがあります。その答えがとても分かりやすいものでしたのでご紹介します。「指紋を見てごらん、視野の中心で見えていませんか。形を正確に捉えようとする人は視野の真ん中で見ます。視野の端では色もどこか鮮やかさが褪せていませんか。なぜかわかりますか。人間の視野は二重構造になっているからです。形や色を正確に捉える中心視野と、精度は落ちるけど幅広い範囲を見て動きを捉えることができる周辺視野の二つの組み合わせです」。なんでそうなっているのかと聞いたところ「周辺視野は潜水艦のレーダーのようなもの、草食動物が常に周囲全体に目を光らせているのと同じです。一方の中心視野は戦闘機の照準器のようなもの、肉食動物が獲物を捉える目です。人間の目は通常二重構造なんです。少林寺拳法は守主攻従だから敢えて肉食動物の視野を殺して平常心をつくり、草食動物の目で冷静に対処するのです。」どうやってそういう状態にするのかと聞いたところ「遠くを見るように視点を合わせず、ぼーっと見るんです。禅と通じるものがありますね。少林寺拳法が動禅たる所以でしょうか」と返事が返ってきました。

「われが城」

川柳を楽しんでいる古参の先生より、「開祖もよく言われていました。道院長支部長は一国一城の主人だと。自分の支部をしっかりと守っていきなさい。」との言葉と一緒に、次の句を教えてくださいました。

道場は

われが城なり

桐の花

